

2017

数字から見る  
日本

今月の提案 Vol.37

## 高齢ドライバーは、本当に危険なのか？ — 社会問題化する“交通事故”

最近、高齢ドライバーの起こした交通事故の報道が絶えない。以前より高齢者による自動車運転事故が問題視されていたが、ここに来て連日のように事故のニュースが報道されている。さらには免許証の自主的返還なども話題となっている。

これだけ毎日のように報道されるとアナウンス効果で、高齢ドライバーは非常に危険だという刷り込みが起こってしまう。

本当に高齢ドライバーは危険なのか？その実態はどうなっているのか？

警察庁が発表している『平成28年上半期の交通死亡事故の特徴及び道路交通法違反取締状況について』（平成28年9月15日発表）によると、「原付以上運転者（第1当事者）の年齢層別死亡事故件数の推移」と「原付以上運転者（第1当事者）の年齢層別免許保有者10万人当たり死亡事故件数の推移」というデータが掲載されている。前者が実数。後者が免許保有者の中における事故発生者の比率で、年齢別の人口比と関係なく、死亡事故を起こしやすい年齢層がわかる。

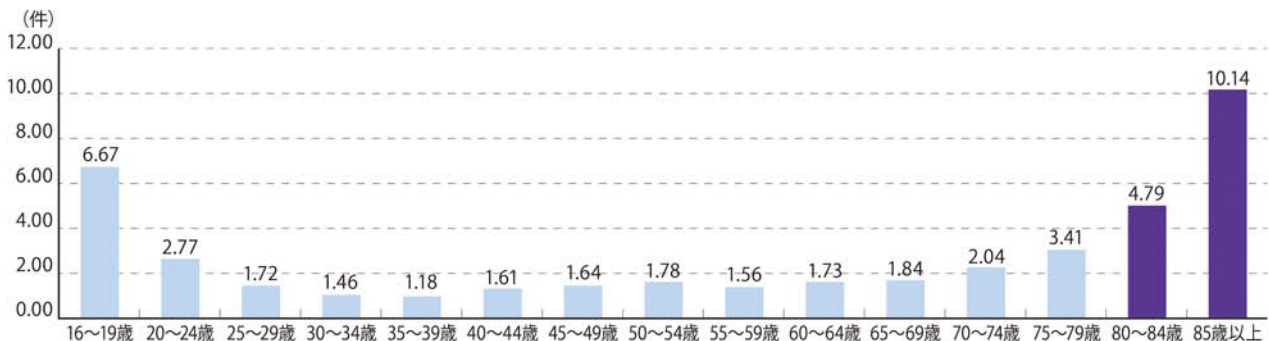
※第1当事者というのは要は事故の原因を作ったドライバー（ライダー）の意味。

このデータによると、実数では1位が40～44歳が149件（構成比率9.4%）、次いで65～69歳が140件（同8.8%）、45～49歳が135件（同8.5%）と40代が多いが、免許保有者10万人当たりで見ると1位は85歳以上で10.14件、次いで16～19歳で6.67件、80～84歳が4.79件と、85歳以上での発生件数が群を抜いて多い。ちなみに85歳以上の実数は53件（同3.3%）で全年齢中、最も低いにもかかわらず、免許保有者での比率では最も高く「危険な年齢層」となっている。

この「免許保有者10万人当たり死亡事故件数」の全年齢の値は、1.93件。これが目安となるが、65歳以上で見ると75～79歳が3.41件（4位）、70～74歳が2.04件（6位）、65～69歳が1.84件（7位）、と上位を占める。

65～69歳は1.84件と全年齢の平均値1.93件よりは低い。70～74歳も2.04件と比較的に全年齢の平均値1.93件に近い。問題はやはり75歳以上、特に85歳以上であり、この年代層への対策が急がれる。

### ■ 原付以上運転者（第1当事者）の年齢層別免許保有者10万人当たり死亡事故件数（平成28年6月末）



#### ■ 参照資料

警察庁 交通事故統計 <https://www.npa.go.jp/toukei/koutuu48/toukei.htm>

平成28年上半期の交通死亡事故の特徴及び道路交通法違反取締状況について <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001159583>



#### 美楽からの一言

高齢者になれば、当然ながら身体機能も知的機能も衰え、運転に必要な判断能力がいちじるしく低下してくる。加えて認知症による危険性も高くなる。

一方で車がないと生活に支障をきたす、いわゆる買い物難民とよばれる層の存在もある。少子高齢化は国を揺るがす大きく、重い課題である。